

インタビュー内容

佐藤幸徳（以下、佐藤）：

まず、先生はなぜ日本、秋田にいらっしゃったのですか。

ビナ サイド先生（以下、サイド）：

私は、（日本の）文部科学省の「国費留学生制度」を用いて、秋田大学に留学しました。公的な理由としては「PHD（博士学位）を取得するため」ですが、元々「世界を見てみたい」と思っていましたし、日本文化、日本人、日本食にも興味があり、「日本を体験してみたい」と強く思っていたことが留学を後押ししました。

その中で「なぜ秋田大学を選んだのか」ということですが、私が元々、イランの大学で師事していたイラン人先生に対して、「日本に留学したい」と希望を伝えたところ、彼は、秋田大学にいる別のイラン人先生を紹介してくれました。そのイラン人先生が秋田大学のF先生を紹介してくれたのです。

F先生は、日本でも有名な研究者ですので、沢山のプロジェクトと予算を獲得してきます。このF先生から得られるものは多く、彼とコネクションを持つことができたのは大変幸福であったと思っています。

佐藤：

日本、秋田に対してどのような印象をお持ちですか。

サイド：

この秋田で暮らしてみて、秋田と秋田大学のことがとても好きになりました。今では秋田が「第2のホームタウン」と言っても過言ではありません。現に、秋田を離れてカンファレンスなどに行くと、秋田に帰りたくなります（笑）

秋田は、コンパクトで静かで、町並みや自然は美しく、公害もなく、安全な街です。家に帰るまで、怖い思いをすることがありません。

そして何より、秋田は親切な人が多いです。私はこれまで7年間、この秋田で暮らしてきましたが、嫌な思いをしたことがありません。

佐藤：

秋田の食べ物はいかがですか。

サイド：

私は、秋田の「きりたんぼ」と「いぶりがっこ」が好きです。

「いぶりがっこ」に関しては、チーズと一緒に食べてもおいしく、気に入っています。お酒を飲むときや、映画やサッカーを見ながら、よく食べています。

佐藤：

初めて日本、秋田にいらした時の印象はいかがでしたか。

サイド：

初めて成田空港に到着した私は、日本語がほとんどと言って良いほどできなかったのですが、親切な人たちが助けてくれて、無事に秋田まで移動することができました。その時に日本に対して良い印象を抱きました。

また、私には、お世話になった日本人のホストファミリーがいます。彼らは、私が留学生として来日した際、私を受け入れてくれました。私が大学を卒業してからも、彼らとは友人として関係を継続しています。

佐藤：

現在の研究内容を教えてくださいませんか。

サイド：

現在は、太陽光、風力、地熱などの再生可能エネルギーに関する研究を進めています。その中でも地熱の「ヒートアプリケーション」に関する研究に注力し、最近ではF先生と、「地中熱ヒートポンプ」に関する研究を進めています。

佐藤：

秋田では風力発電の導入が進んでいますね。

サイド：

秋田は風力発電に適しており、導入が進んでいます。秋田は再生可能エネルギーに関するポテンシャルを持っているので、同エネルギーだけで県内の全電力を賄う、日本の初めての「グリーンシティ」になるのではないかと期待しています。

佐藤：

話は変わりますが、イランの電力事情はいかがですか。

サイード：

石油とガスがほとんどですが、最近では、他国と同様、再生可能エネルギーの導入が進められています。まだ電力全体に占める割合は小さいですが、主に風力と太陽光で導入が進められています。風力発電は国土の標高が高いので好適です。一方、地熱発電所に関しては、あまり進んでいません。

佐藤：

日本とイランの研究環境に関して、違いは見られますか。

サイード：

私は、日本の研究環境は素晴らしいと思っています。特に、日本の「ラボ」スタイルは素晴らしいです。ラボでは、デスクやコンピュータなどの十分な研究資材が割り当てられ、学生はそれらを日常的に使用できます。「ラボ」には、学生を指導する研究者がいますので、質問などもできます。このシステムは研究を行う上でとても生産的です。

また、日本の大学では、研究に関して、多額の予算が割り当てられています。これにより、若い研究者が海外のカンファレンスやワークショップ、インターンシップに参加できます。イランでは中々、このようにはいきません。これは、彼らの将来にとって、大変有益であると考えます。実際に私も、国内外の多数のカンファレンス等に参加させてもらいました。

加えて、イランの、大学院以上の学生の中には、学業の他に企業等でフルタイムの仕事をしている者もいます。彼らは仕事の休みの日などに学業に専念しています。日本の学生は、アルバイトをしている者は多いですが、基本的には研究に打ち込むことができるので、恵まれた研究環境であると言えます。

佐藤：

サイード先生は、イランの大学に在籍していた頃、どのような修士論文を書きましたか。

サイード：

今と同様、地熱発電に関するものでした。

地熱発電は、地面を深く掘って、熱水や蒸気が出る場所まで行き着き、そこに井戸を作ります。そして、そこから得られた蒸気を使ってタービンを回し、発電する仕組みとなっています。

このためには、数千メートルにも渡って地面を掘り続ける必要がありますが、中には「掘っても何も出てこない」ということもあります。こうなると、これまで井戸を掘るために要した多額の時間と投資が無駄になります。そこで私は、このような「何も出て来なかった乾いた地熱の井戸の再利用」に関する研究を、特に熱交換器に焦点を当てて、修士論文のテーマとしました。

佐藤：

最近、「日本政府は研究予算を減らされている」と多くの研究者が憤っています。

サイード：

私の感覚では、日本は、他国と比べて、比較的多くの予算が配分されていると思いますが・・・。

一方、イランでは、予算は少ないですが、研究者は皆、熱心に研究し、ジャーナル（学術雑誌）などに論文を積極的に出しています。日本は、多額の研究予算を活用して、より論文などを積極的に出していくべきだと考えます。

佐藤：

サイード先生は、現在、イランとの間で共同研究を行っていますか。

サイード：

現在、秋田大学とイランの大学とで、共同研究は行っていません。いずれ、日本とイランとで共同研究を行うのが、私の夢です。もちろん、自分が論文を書くに当たって、イランの研究者のデータなどを参照することはあります。

佐藤：

日本で注目に値する研究分野などはありますか。

サイード：

研究ではないですが、日本政府は最近、「2050年までにカーボンニュートラルを目指す」と表明しました。これは、私が研究している再生可能エネルギー分野と強い関連があります。政府がこのような方針を出すことは素晴らしいことであると思います。

佐藤：

最後に、若手研究者へのメッセージを頂きたいと思います。

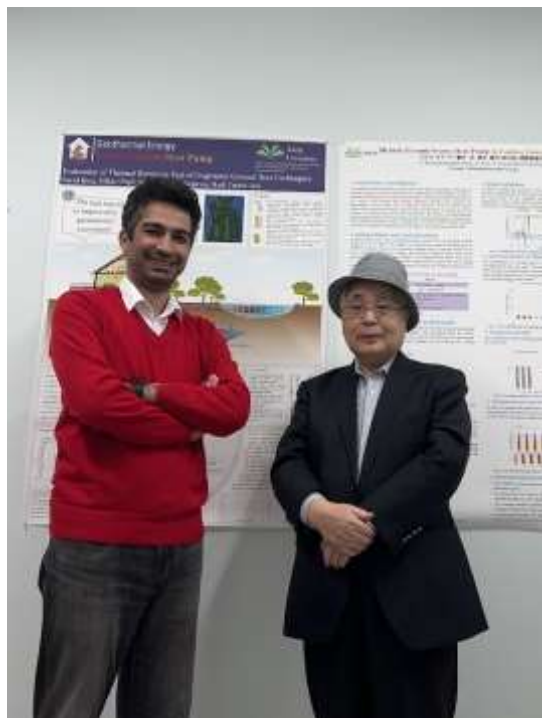
サイド：

まず私は日本の学生がとても好きです。彼らは総じて、勤勉かつまじめに研究に取り組んでいます。

私が彼らに伝えたいのは、「もっと積極的に、研究結果を世界に出してほしい」ということです。要するに「論文を『カンファレンス』や『ジャーナル』などに出す」ということです。論文を出すことは、世界中の研究者と研究成果を共有させる唯一の方法です。これにより、自身の論文が世界中の研究者の目に触れ、チェックしてもらうことができます。今後の研究にとって有益なフィードバックなどをもたらすことができる可能性もあり、研究内容の一層の向上につながります。

私はこれまで、沢山の論文を書き、発表してきました。目に見える形で発行物を出すことは、大学のランキングを高める効果もあります。ひいては秋田大学や秋田の研究界に貢献するものと思っております。

繰り返しになりますが、若い研究者の皆様には、一つでも多くの論文を世に出すよう、努力してほしいと考えます。



サイド先生（左）と佐藤（右）
（インタビュー後にサイド先生のオフィスで）